

巨峰のまちへ

越智先生と田主丸の人々

「越智通重氏関係資料」

本資料群は、田主丸町を巨峰の大産地に育てた越智通重（1916～81）が編集した雑誌、栽培日誌、研究ノート、押し葉標本、葡萄や食に関する収集物など1067点で、年代は明治後半から平成11年（1999）に及びます。

越智通重は、巨峰の生みの親、大井上康の門下生で、昭和30年（1955）に田主丸に招かれ、地元の人々と共に九州理農研究所を立ち上げ、栽培技術を深めました。同32年（1957）、有志5人と共に巨峰の改植・栽培に初めて成功して

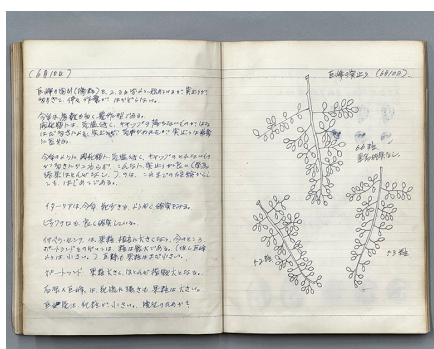


「果実文化」昭和36年（1961）1月創刊。翌年7月に「理農技術」に合併されるまで田主丸から情報を発信した

います。その後、巨峰栽培は田主丸の耳納北麓を中心に広がり、人々は観光巨峰狩りを成功させ、田主丸は巨峰のまちとなりました。

雑誌「果実文化」（上段写真）は、九州理農研究所内の果実文化協会から発行されたもので、栽培農家の寄稿も交えた会員制月刊誌です。購読者は国内外に広がりました。

栽培日誌「葡萄の生態」（下段写真）には、葡萄の生育状況がスケッチを交えて詳細に記録されています。葡萄以外の果実はもとより、野菜、肉、魚など食全般に関すること、さらには食を取り巻く環境や市場調査までもが記されています。本資料群には、こうした日誌や研究ノートが多数含まれています。



「葡萄の生態」。このページのような観察記録以外に、食に関する新聞や雑誌の切り抜きも貼付されている

戊辰戦争の肩章や手旗

従軍日記が寄託から寄贈へ

「小川家資料」

久留米藩士小川弥八郎に関するもので、新政府軍として戊辰戦争に従軍した際の日記、肩章や手旗など総数7点が伝わります。平成23年度より寄託を受けていましたが、令和6年度に寄贈されました。

日記は慶應4年（1868）3月5日に国元の久留米を出発したところから始まり、上野戦争・奥州追討を経て、翌年1月11日に久留米に凱旋するまで、4冊にわたって記さ



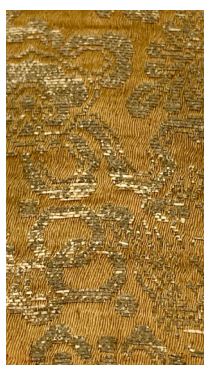
新政府軍の手旗。大きさは縦43.2cm、横76.4cmで、右下隅に「筑後小川彌八郎宗高」と墨書されている

れています。

ここでは、共に残されてきた手旗に関する記事を紹介いたします。

弥八郎の「奥州出兵中日記」によると、慶應4年8月7日に久留米藩兵などの新政府軍が相馬城下に乘込んだ際、味方の手旗は赤1色とされていきました。その後、同24日に上半が赤・下半が白の2色の旗に変更されましたが、これが敵方に奪われてしまったため、白赤白の柄に改められました。実物が伝わるのは、この3柄目の手旗です。

また、肩章は錦裂に「総督府」印が押されたもので、手旗や日記とあわせて、弥八郎の従軍を証する貴重な資料です。



新政府軍の肩章。「官軍」の証で錦裂が用いられている。印文は「大総督府之印」とある。左は錦裂の拡大写真